

栃井 裕美*

セルボ・クロアート語文学史におけるユダヤ人 — 史的分析のための予備的考察 —



序章 ユダヤ人文学の論点

1. 小論の目的

旧ユーゴスラヴィア（以下旧ユーゴ）のユダヤ人文学者が持つ、歴史的背景とアイデンティティは興味深い。同地は多くの要因が複雑に混ざり合うことで、素晴らしい文学を生み出してきた。多民族混住地域においてユダヤ人という存在は一際マイノリティーであり、そうした彼らの歴史上の経験は独自の世界観を生み出すに至った。19世紀末に同地域でユダヤ人の平等権が認められ社会進出の基盤を作り上げると、文学界においてもユダヤ人の教育水準の高さと特異な経験によって、秀でた文学者を輩出してきたのだった。

第二次世界大戦以前に生を受けた文学者である、エリ・フィンツイ、エリフ・コシュ、アレクサンダル・ティシュマ、ダニエル・キシュらはホロコーストの被害を直接受け、その自身の文学に少なからず影響を及ぼしている。ホロコーストによって彼らの中に生まれた「ユダヤ人が人間としていかように他民族と違うのか」といった問題は、彼らにより深い人間考察の機会を与えた。

戦後世代であるダヴィド・アルバハリは、旧ユーゴで生まれ育ったユダヤ人像を描写する。彼の小説が、ユダヤ人のみならず旧ユーゴ出身の諸民族の感情をも代弁するものでもある点で、「ユダヤ人の人間としての差異」に悩まされた戦前世代とは違ったものとなっている。戦後

世代、すなわちホロコーストの間接的な犠牲者としての作者の立場は、先代たちにはない感覚で物事を捉えるものであった。

小論では彼らのような個性的な文学者が誕生した理由を、歴史背景と彼らを取り巻いた社会情勢に注目して検証したい。なお、セルボ・クロアート語文学史については固より、同言語圏におけるユダヤ人文学の研究が邦語文献では皆無に近い状況に鑑み、小論はまずもって歴史的概観を描写する作業を優先し、筆者自身の研究の展開に布石を置くことを目指すものである。

2. 関連研究

今回のテーマに取り組むにあたり、参考とした旧ユーゴの先行研究を見てみることにする。まず、旧ユーゴのユダヤ人文学の位置づけとして、ユダヤ人の発想方法や経験によって生じた物語性への評価が大きいように考える。すなわち、非ユダヤ人評論家が、物語の独自性を著者のユダヤ性に起因させ、意味づけする作業が主に見られたのだ。このユダヤ人文学という安逸な概念化を真っ向から否定し、ユダヤ人文学をユーゴスラヴィア文学として普遍化させる努力をした文学者が存在したが、批評する側の問題設定が「ユダヤ人文学」から始まることや、さらにマジョリティーによるユダヤ人文学の評価点が「ユダヤ人独自の人間考察がなされているか、物語性があるか」に定説化されていたため、ちぐはぐな主張に陥ってしまった。世界のどこ

* Univerzitet u Beogradu, Filozofski fakultet, Master za sociologiju (セルビア国立ベオグラード大学社会学部修士課程)

で進行しているのか、登場人物の出自がどこであるのか、何者であるのかなど具体概念を全く必要としない物語など存在し得ないかもしれないが、物語の持つ普遍概念は民族の出自にこだわらず、ユダヤ性を第一に置くことなく認められるべきであった。マジョリティーによる批評の限界は、ユダヤ性を評価基準の一つに用いることがしばしば偏見を生じさせていることであろう。また、現在においては、民族にとらわれない作家への視点も登場し、作品への解釈がより多様化した。また一方で依然としてマジョリティーから見た「ユダヤ性の再発見」が注目を受けているように考える。

したがって、旧ユーゴのユダヤ人文学を考えるにあたり、非ユダヤ人によるユダヤ性に注目した評論を採用しつつ、ユダヤ人文学者のユダヤ人である出自と文学に対する意識的な態度を読み取りながら、補強を与えたい。また、マジョリティーからの影響、すなわち政治、文化、思想などにも注目するつもりである。

3. 研究方法

ところでユダヤ人の文化基盤は、ユダヤ教を軸にした伝統、生活習慣であろう。これらが文学者たちのアイデンティティとして存在していることは明白である。さらに、周辺民族の文化が混じることで彼らの生活に変化を及ぼしている。そして忘れてはならないことに、彼らの特徴付けていることとして、常に国内で少数派として存在し、時には周辺民族からの差別を受けたことがあげられる。こうした他者からの視線が、特殊な思想を持つユダヤ人文学を多く排出する要因でもあった。

さて、「ユダヤ人文学」とはいえ、どのような定義がなされるべきか。小論を執筆するにあた

り、特に注意したのは以下の2点である。

第一に、文学者の出生がユダヤ人であったこと。そしてそのことを少なからずアイデンティティとして所有していることである。ゆくゆくは改宗や同化でユダヤ教を破棄した者もこの範囲に含むものとする。民族の混住地域であったバルカンでは一国一国民の概念は適応できず、個人が出自と国家への帰属意識を複数所有することも有り得た。この論文で扱う、旧ユーゴ出身のユダヤ人文学者であるが、混血も少なからず、正教徒として洗礼を受けたものも存在する。彼らの多くは世俗化され、ユダヤ人としてのアイデンティティの存在を自身の中に発見しつつも、周辺民族の影響を大にうけながら生きたのであった。

二つの世界大戦、ユーゴ紛争、コソヴォ紛争など、歴史的経緯を共にする複数民族の間には思想的に共通点が見られ、セルビア人とユダヤ人にもそれは当てはまっている。歴史の共有の結果、ユダヤ人文学者によるセルボ・クロアート語¹⁾で記述された、現地住民も持つ潜在意識を描写した文学作品を生み出すことに成功したのだった。ユダヤ人としての特質、ユダヤ人の周辺民族との同質性は、旧ユーゴという舞台と深く関わることで非常に興味深いものとなっている。

第二に、セルボ・クロアート語で書かれたユダヤ人文学に焦点を絞ることである。近代化を経たユダヤ人にとって母語というものは、やはり彼らが住む土地の言語であるからだ。セルボ・クロアート語を使用するということは、その土地の生活習慣を少なからず自らに取り入れ、純粋なユダヤ文学というものの存在はあり得ないと考える。セルボ・クロアート語で作品を発表するという行為に、どのような背景と思想があ

るかを検討したい。

中世にはユダヤ人によるラテン語文学、セファラディムによるラディノ語文学、アシュケナジームによるイディッシュ文学、ラビによるヘブライ語文学も存在するが、研究対象外とする。また、1948年のイスラエル建国とともに起こった、現代ヘブライ語復活のブームの影響も考慮しないことにする。今回の論文では、圧倒的多数であるセルボ・クロアート語で書かれたユダヤ文学について扱うことをここで確認しておきたい。

本稿ではまず、ユダヤ人文学が誕生するに至った歴史背景を辿り、時代ごとに存在する思想的流行を意識しながら、時系列に文学者とその特徴を挙げていくことにしたい。

第1章 セルビアにおけるユダヤ人文学の起りと発展

1. 言語改革

ユダヤ文学の発展は、当地のセルボ・クロアート語の発展が基盤にあった。19世紀に民族観が芽生え、国民国家の基礎が作られると、その範疇での文化や言語の発展に伴って優れた文学作品が登場するようになった。多岐にわたる分野で優れた知識人が誕生することでアカデミズムが発展し、特にリュブリャナ(Ljubljana)、ザグレブ(Zagreb)、ベオグラード(Beograd)、ノヴィ・サド(Novi Sad)、サラエヴォ(Sarajevo)が文学活動の中心地となった。

言語の発展に多大なる役割を果たした学者がいる。18世紀末に誕生した言語学者、文学者、歴史家であるヴーク・カラジッチ(Vuk Stefanović Karadžić 1787-1864)が言語改革に果たした役割は大きい。彼はそれまで正教会中心に使用されていたセルビア語の文法をまとめ上

げ(1814)、さらにそこに「一音一字」の法則を加えるなどの大改革を行ったのである。現在でも語り継がれるほどのこの言語革命は、正教会や支配階級の言語であったセルビア語²⁾をより大衆化させた。

この言語改革において、ユダヤ人が果たした役割も特筆すべきことであろう。当時の言語学者には何ヶ国語も操るような人物がざらでもなく、カラジッチ自身もそうであったし、当然ながら多くの言語の特徴を知りうる者が、言語をよりよく改革し得た。ポーランド出身の父を持ち、セルビアで生まれ教育を受けたユダヤ人スタニスラフ・ヴィナヴェル(Stanislav Vinaver 1891-1955)は、セルビア語をはじめ12カ国の言語に精通しており、その博識は文学のみにとどまらず、セルビア語の発展という観点においても言語学者に大きな影響を与えることとなった(Predrag Palavestra, 2003, p160)。

セルビア語が民衆の言語として確立されたことで、その後の文学界に広がりをもたらされた。それらは南スラヴ民族によるイリリア運動に起こったロマン主義、ヨーロッパから影響を受けたリアリズムなどの洗礼を受けた文学者であったが、ユダヤ人文学者も同様の傾向を持っていた。セルビア語の修辞法を身につけ、いくらか似通った文化的背景を持ったユダヤ人文学者たちは、マイノリティーでありながらもセルビア文学界で確固たる地位を築き上げる者も現れ始めるまでに至った。

こうした活躍の背景に、ユダヤ人の平等権獲得と発展があり、次章ではその経緯を追ってみたい。

2. セルビア社会へのユダヤ人の進出

セルビア近代史におけるユダヤ人の地位の向

上は、オスマン・トルコ帝国からセルビアが独立し、近代国家として誕生することから始まる。1878年のベルリン会議でセルビア王国の独立が承認され、西欧的近代化への道を歩みだすと、これまで保たれてきた社会が根底から変わっていった。同会議で諸宗派の平等を認めたことで、バルカン諸国にユダヤ人問題を解決させる糸口となったのだが、セルビアはこれより10年後の1888年に制定された憲法にて、非ユダヤ人と同様にユダヤ人に平等権を与えた。また、急進的と評価されるこの1888年の憲法において、王の権限を国家へ移行し始める試みが始められたことも重要であり、議会体制も複数政党制にのっとりた議会主義へ変えられ、また、選挙権をはじめとする国民の権利、納税の義務などの国家体制が整いはじめた時期でもあった。このように、セルビアは1880年代に政治経済面で近代化を図り、主要民族と同等の権利を持ったユダヤ人にいたっても社会的地位獲得の機会が巡ってきたのであった。なお、第一次世界大戦終了までがこの時期にあたっている。

実際のところ建国はセルビア民族主義の実現であったと言え、当地域のユダヤ人はセルビア中心の社会基準に合わせる必要を求められた。

まずは社会進出の基盤となる上で重要な教育について述べたい。セルビア王国以前、オスマン・トルコ帝国は非ムスリム住民に対して比較的緩やかな支配を揮っていた。各民族が宗教上の伝統や習慣、または教育を守ることができたことに、帝国が各宗教に基づいた自治制度を採っていたことが重要であった。ユダヤ教自治における教育は、もっぱらシナゴークで男児を中心に行われていた。なお、1492年3月スペイン皇帝フェルディナンドと王妃イザベラによるユダヤ人の追放決定により、多くのセファ

ラディムがオスマン・トルコ帝国領土へと移り住んだ歴史的背景から、セルビアにはセファラディムが多数を占めており、すなわち教育においては主にスペイン系ユダヤ人の言語であるラディノ語が使用されていた。1895年の統計では、ユダヤ人の人口はセルビア全土で5102人、ベオグラードで3097人。その内ラディノ語を母語としているもの数であるが、注目すべきことにセルビアで4056人、ベオグラードで2391人を数えた(Marko Perić, Srećko Stanić, 1990, p285)。

アシュケナジームも存在していたが、セファラディムとアシュケナジームは別々の共同体を作って活動していた。彼らは宗教こそ同じだが、文化、言語、背景も異なることが多かったため良好な関係を築いてこなかった。アシュケナジームは1879年9月24日に共同体を形成し、シナゴークも建設するなど独自に発展させている(Avram Pinto, 1987, p13)。同時に独自に学校を設立し、シナゴークではイディッシュ語で教育を行った。

19世紀初頭には、ほんの少数のユダヤ男児が教育を受けるのみであったのが、同世紀中葉にもなると教育基金を設立する運動が行われるなど、教育のための活動が盛んになることで、教育を受ける児童数も増えていった。1864年には、政府の学校にユダヤ人の男子生徒が参加するようになった。セルビアで初めてのユダヤ人女子生徒用にヤリヤ学校(Jalija)も設立された。

ユダヤ人学校では、その必要性からセルビア語教育が始められるようになった。当初の評価であるが、1873年のユダヤ人学校のセルビア語教師による記録においては、全校生徒約100名が、かろうじてセルビア語を理解する程度であることを告白している(Predrag Palavestra, 2003, p39)。また、児童教育以外にも、社会進出の際

のセルビア語の必要性を自覚していた若い世代により、1872年にセルビア語会話のための特別学校の設立の要求が出された。この要求は直ちに政府に認められ、1873年には「セルビア・ユダヤ青年の教育のための社会学校」が開校されるに至る。なお、このコースはギリシア人など他の外国人向けにも私費で開講されており、語学学校的要素の強い学校でもあった (Predrag Palavestra, 2003, p40)。

19世紀末、ユダヤ人学校は続いてシャバツ (Šabac)、ピロット (Pilot)、スメデレヴォ (Smederevo) に設立された。同様の語学学校は、オーストリア＝ハンガリー二重帝国内にあったヴォイヴォディナ地方 (Vojvodina) においても確認されており、そこではユダヤ人のみならず、ドイツ人やハンガリー人が第二言語として学習するケースも報告されている (Predrag Palavestra, 2003, p40)。セファラディム、アシケナジーム両者によるセルビア語教育の取り組みにより、1900年にはセルビアにおける識字率は全体で20% (都市部においては40%)、ユダヤ人に関しては男性が80%、女性が55%に上昇した (Predrag Palavestra, 2003, p40)。

このようにユダヤ人はセルビア語の学習をすることで、社会的地位の獲得に尽力し、文化的な活動の基礎を作っていたのである。論題は少しそれるが、ここで彼らの本来使用していた母語についても言及しておきたい。ラディノ語、イディッシュ語による活動は、市民権獲得以前にも新聞発行などで盛んに行われており、こうした文化的・政治的活動は国境を越えたものであった。彼らは独自にバルカン半島の各地に点在するユダヤ人コミュニティ間の交流を図り、当地の主要民族とは違う文化圏を形成していた。こうした状況はセルビアがオスマン・ト

ルコ帝国の統治を受けていた時代から存続し、文化的な発展上重要であることから見逃すことはできない。

教育については徐々に成果をあげてはいたものの、やはり当時のユダヤ人には就職機会などに不利な点も多く、社会進出は困難な道なのであった。20世紀初頭のセファラディムの主な職業は、商人や熟練工が大多数を占めており、政府や軍などへの参加の道は一般的には開けていなかったとされる (Predrag Palavestra, 2003, p42)。一方、オーストリア・ハンガリー二重帝国から入植してきたアシケナジームは、西欧レベルの技術を身に付け、行政官、熟練工、医療関係の職種につく者も存在していたようだ。このように両者の職業基盤に違いは存在するものの、第一次世界大戦が終わる頃にはユダヤ人の社会進出は成功した。特に、近代国家として歩み始めたばかりのセルビアにおいて、ヨーロッパに向けた独自のルートを持った彼らの存在は大きかった。

社会進出が成功することにより、セルビアのユダヤ人にも同化主義が見られるようになる。何をもって同化とみなすかの問題は、最終的にはユダヤ教の破棄である。国内に同化主義者も確かに存在したが、第二次世界大戦までユダヤ人の同化はそんなに多くは見られない現象であった。なお、同化主義はセルビアでの地位獲得や、混血に起因する。同化主義まで達しない者は、教育や啓蒙活動などを通じて主要民族の思想に近づきつつも、家庭やコミュニティーでは宗教活動によりアイデンティティを維持した。また、セルビア社会がユダヤ人に対して寛容であったことが同化とセルビア化を促進した理由にあげられる。こうしたセルビア社会へのユダヤ人の浸透は、親ユダヤ的なミロシュ・オ

ブレノヴィッチ (Miloš Obrenović 1780–1860) の即位とともに一層進むこととなった。彼らは地域の政治・経済・文化活動に積極的に参加した。1912年から1913年の第一次バルカン戦争には、セルビア軍にユダヤ人口の10%が参戦していることもその証明であろう (Aca Singer, 1996, p3–4)。

3. 19世紀セルビアにおけるユダヤ人文学の始まり

19世紀末、ユダヤ人によるセルビア語で表現された文学が見られるようになる。ここではアヴラム・オゼロヴィッチ (Avram Ozerović 1848–1916)、ヨヴァン・マンディル (Jovan Mandil 1873–1916)、そしてハイム・S・ダヴィチヨ (Haim S. Davičo 1854–1916) を近代セルビア文学界が生んだ最初のユダヤ人作家として取り上げたい。また、1894年にはセルビア側、ユダヤ側の高学歴者が参加した「セルビア・ユダヤ文学協会」が設立されている。彼らの仕事は翻訳活動や文化紹介などが主だったものであった (Predrag Palavestra, 2003, p42)。

オゼロヴィッチはウィーンのビジネスアカデミー (Viša komercijalna akademija) を卒業したベオグラード初のユダヤ人であり、セルビア語、ラディノ語、ドイツ語、フランス語を自由に操り、1896年までセルビア議会の議員を勤めていた。ベオグラードにあるユダヤ・セファラディム信仰共同体 (Jevrejska sefardske veroispovedne opštine) の副長にも選出された人物である。彼はバリのAIUを、1882年にセルビアにおいても設立し (Ženi Lebl, 2001, p201)、ユダヤ人の権利獲得、教育に関して積極的に取り組んだことで功績をあげている。

ヨヴァン・マンディルはシャバツに生まれ、同市でギムナジアを終了した後、弁護士、ジャーナリスト、作家として活躍した。その後、セ

ルビア政府の意向で南セルビアの町ビトリイ (Bitolj) へ派遣され、当地で彼は『ビトリイ新聞』 (Bitoljske novine) を創設し、編集者、記者として働いた。セルビア政府がマンディルに目をつけた理由として、彼が演説者として優れていたこと、そしてセルビアの大セルビア主義に対するユダヤ人の支持を得るためとされており、また、マンディル自身もその要求に答え、その活動に専念していたのである。彼は公共的な印刷物に、ユダヤ人として始めて執筆活動を行った著者のうちの一人である。

ハイム・S・ダヴィチヨも同じくシャバツに生まれ、セルビア語を習得し、後にベオグラード大学法学部で教育を終えた後、当時はまだユダヤ人がほとんどいなかった政府で仕事を得る。そこでは語学の才能を認められ、外交、財政面で働き、セルビア貿易機関の長としてペシュト、ローマ、ミュンヘン、ソルン、ジェノヴァで活躍した (Ženi Lebl, 2001, p165)。なお、彼の親戚にあたるダヴィド・ベン・ハイム (David ben Hajm) は、ミロシュ王の統治期に、初のユダヤ人外交官として登用されていた。H・S・ダヴィチヨは最終的に、ドイツにおけるセルビア貿易の代表役を務めた。それと同時に、いくつかの雑誌にナレーターとして参加し、演劇部門で評論家や通訳を行っていた。このように各方面に渡る活躍と、10年以上もの間セルビア国立劇場の文学・芸術委員会の役員であったことから、セルビア社会においても彼の知識の広さと地位の高さは容易に想像できる。彼は、その豊かなセルビア語の表現能力で、セルビア文学界における短編物語の先駆者でもあった。1898年に処女短編集『川岸から』 (Sa Jalije) が出版され、これによりセルビア文学界やユダヤ人コミュニティ内で、賛否両論の新しい論題を提

示するきっかけとなった。当時、ユダヤ人が完全なる同化に必ずしも向かわなかった傾向のうち、問題のひとつにセルビア語の習得によって、ラディノ語の衰退現象が起こるというジレンマがあったとすると、H・S・ダヴィチョは完全なるバイリンガルという形でそれを乗り越えたと言えるだろう。自らの言葉はラディノ語であるという意味と、完璧で豊かなセルビア語での表現を彼は体現したのだった。ユダヤ人がセルビア社会に適応する過程で、言語の変更は19世紀末に加速し、セルビア語表記のユダヤ人文学が登場するようになった。しかしながら当時、ラディノ語やイディッシュ語は決して失われたわけではなく、この当時は家庭などで保護されていたことも忘れてはならない。彼らはまだ完全にセルビア文化に呑まれたわけではなく、その自己意識の基本にあるのは、程度の差さえあれ「ユダヤ人である」ということだった。

各派閥が存在し、お互いが牽制しあうなかにあっても、20世紀初頭にはユダヤ人の半数近くがセルビア語を母語として認識するに至り (Ženi Lebl, 2001, p169)、シオニストの冊子でさえも、キリル文字のセルビア語で表記されるようにまでなった。

20世紀初頭のユダヤ人のセルビア語で表記された文学は、主に政府からの恩恵を受けていた特権階級出身の作家、その中でも特にセルビアへの同化主義傾向の見受けられる者であり、教育普及の取り組みが行われたにしろ、下層階級からの文学作品が見られなかったことが特徴としてあげられる。

4. セファラディムによる文化活動と発展基盤

バルカン半島における、セファラディム文化の繁栄について述べることにしたい。特にオス

マン・トルコ時代、交易の中心都市であったサラエヴォで築き上げられたコスモポリタンな社会が、文学に果たした役割は大いに考慮すべきである。先述のように、オスマン・トルコ帝国は各宗教に基づいた自治制度を採っていたのであるが、その他にも比較的自由度の高い帝国の経済システムは、人と物の移動を促していた。また、ユダヤ人に限って言えば、彼らはオスマン・トルコ国内のみならず他地域のユダヤ人コミュニティとも繋がりつつ、新たな技術、情報、物そして文化などを取り入れていったのである。このような背景から、セファラディム文化はより豊かに変容していった。

19世紀、サラエヴォではユダヤの文化性というものに注目した者が少なからず出現し、彼らはラディノ語をはじめとしたユダヤの独自性の保護活動を始めるなど積極的であった。また、新しい世俗的なラディノ語を使用したユダヤ文学も出現し始めたのだった。こうしたことは、ヨーロッパを中心にするユダヤ人の権利拡大運動、近代化の影響が、バルカン地域へ及んだ結果であることは言うまでもない。

ところで、セファラディムの文化の中心地であると考えられていたテッサロニキは、特に旧ユーゴ各地のユダヤ人コミュニティにとって重要であり、オスマン帝国支配下全土のセファラディムにとって重要な影響力を持っていた。文化シオニズムの先駆者の一人として有名な、サラエヴォの出身のユダ・アルカライ (Juda Alcalay 1798-1878) が当地で誕生したことは決して偶然ではなく、テッサロニキやコンスタンティノーブルとつながったバルカン地域のユダヤ人共同体が、いかにユダヤ文化の開花を成し遂げたか、そしてサラエヴォの果たした役割がいかに大きかったかの一例である。

さてそのアルカライであるが、ベオグラード、ゼムンにも親族があり、それら各都市への親密な関係も維持していた。彼はゼムンでセファラディム系の学童向けの教師、後にラビとして活躍し、その他にも彼の文学者としての活動は注目に値する。これまでもラビによる文学というものが存在していたが、アルカライはベオグラードとサラエヴォのラビ文学を高めた人物であった。彼はヘブライ語で約12冊の書物を、バルカン地域のみならず、ロンドンでも出版した (Predrag Palavestra, 2003, p66)。彼のシオニズムを奨励する著作は、このうち処女作「穏やかな生活 (Daehe noam)」であり、1839年にベオグラードで出版されている。実際のところ、本書は辞書を兼ねたヘブライ語の文法書であった。しかしながらこの一冊のみが、彼の著作のうち唯一ラディノ語で書かれているものである。ヘブライ語の文法書という観点から、習得の言語であるラディノで表記されるのは便宜上の理由であるかもしれない。しかし、こうした特徴を持つ書物にシオニズム的の観点を取り入れたという点は注目するべきではなかろうか。彼の活動は、いつの日かパレスチナにユダヤ人国家が建国された時、その結束性が国語に求められるべきであるという思想を持っていたことに起因する (Predrag Palavestra, 2003, p67)。

セルビアのユダヤ人は、ミロシュ・オブレノヴィッチの即位によって権利を享受するに至った。第二次セルビア蜂起でのユダヤ人の貢献を評価したミロシュ王は、ユダヤ人を優遇する政策を採用した。具体的にはユダヤ人のラビから税を免除し、70歳以上のユダヤ人からは税金を無徴収にする法律などを制定し、さらにユダヤ人とセルビア人商人の間の関係を進展させようと試みた。そして王自ら頻繁にユダヤ人地

区を訪問し、両者の関係は良好なものであった (Harijet Pas Frajdenrajh, 1990, p367)。ミロシュ王の時代、主にベオグラードなど王国都市部でのユダヤ人の活動が、彼らの社会的地位上昇とともに一層活発化した。こうした保護政策の下、ユダヤ人の出版物についての問題解決もなされた。セルビア公国内に関して言えば公国出版部が出版を担っており、すべての各共同体、活動団体に適応されていた (Predrag Palavestra, 2003, p67)。以前からウィーンにはセルビア出身のユダヤ人であるダヴィチョー族 (既出) が住んでおり、彼らがベオグラードに公国認可の出版局を創立したという背景がある。こうしてセルビアのみならず、バルカン地域のユダヤ関連書物の出版が許可されたのだった。ダヴィチョー族による出版に対する一連の努力は、ミロシュ王とつながりを持つことで実を結び、次第に祈祷書、教科書、法律書、神学に関する学術論文、聖書の解釈に関する本が出版されるまでに至った。ここで多くのユダヤ人が著書を発表し、19世紀末には宗教本、宗教観を反映した詩などが翻訳された (Predrag Palavestra, 2003, p68)。特に、セルビア側にもユダヤ人の習慣を受け入れる出版活動がされていることは興味深く、1853年から1859年までウィーンで印刷された、セルビアのカレンダー『ヴォイヴォジャニン』 (Vojvodanin) にユダヤ暦が加えられている (Predrag Palavestra, 2003, p65)。なお、サラエヴォのユダヤ人はそれ以前、コンスタンティノーブル、サロニツァ、ヴェニス、後にはウィーンで出版していた。

ここで話をラディノ文学に戻すとするが、ヨーロッパから渡来したシオニズムや民族主義などの思想の影響を受け、ラディノ文学にもそれまでのユダヤの宗教的慣習等に基づいた作品

ではない、近代思想を反映するようになる。イスラム教、正教、カトリックそしてユダヤ教の各文化がミックスされた地域であったサラエヴォにおいては、その土壌の影響がさらに異なる思想をもたらすこととなった。セファラディムの言語、文学が周辺民族の言語から影響を受けることで開花していったという事実を忘れてはならない。

5. シオニズム・反ユダヤ主義

第一次世界大戦後に設立された、セルビア人・クロアチア人・スロヴェニア人王国(1929年ユーゴスラヴィア王国に改名)においても、ユダヤ人の権利は他の市民と同様に認められていた。このころになると、ユダヤ人の政治への参加が見られるようになる。急進派のユダヤ人からは「ユーゴスラヴィアのユダヤ人は、ユーゴスラヴィアの子供である」、「宗教のモザイク、ユーゴスラヴィア」など思想的にも積極的に共産主義の思想を受け入れるように宣伝した。また、ユーゴスラヴィア王国のユダヤ人に対する態度は、他の国々に比べまだ緩やかなものであったことから、多くのユダヤ人難民がやってくるようになった。ユーゴスラヴィア・ユダヤ人共同体のデータによれば、1933年から1941年までのあいだに55000人のユダヤ人が移民している (Aca Singer, 1996, p6)。

ところで19世紀末からの、ユダヤ人の民族主義による政治的シオニズム運動は、この地域にも支持者を着々と増やした。シオニストにとって、社会的進出も重要であるものの、周辺民族の習慣を受け入れセルビアに同化し、ユダヤ教を破棄することは避けられるべき事態であった。そして、情勢悪化も加わって、シオニストたちは1920年代にイスラエルへの移民を開始し

ている。急進的なシオニストたちはもちろん、シオニズムとマルクス主義が合体した思想の持ち主も積極的に加わっていった。すなわち、ユダヤ人プロレタリアートの解放のために、パレスチナでユダヤ人国家を設立するという解決策に身を投じた者たちであった。

しかしながら同時に、マルクス主義も国内で勢力を拡大し始めたことが、ユダヤ人社会にも変化をもたらす。多数のユダヤ人にとって、離散後に辿り着いた土地がホームランドであることは事実であり、シオニストの中にも現状を理論的に解決する試みがなされるようになった。やはり一般ユダヤ人がまだ貧しかったということも、よりよい社会を作り上げると言う理想を唱えたマルクス主義の拡大を助長した。さらに、シオニストの一部には、プロレタリア国際主義を離散後の土地で実行する勢力も生まれた。左翼運動に参加したユダヤ人の知識人は、その理念の進展に少なからぬ役割を果たすこととなったが、特に、ユーゴスラヴィアと言う土壌では、後にこの活動が大きく評価されることとなる。

また、ユダヤ教の持つメシア観と、社会主義的・共産主義的ユートピアへの使命感が似通っていたことも左翼運動の拡大に大に関係していたこともあげられる (プレプク・アニコー、p147-148, 2004)。

以上のように、ユダヤ人とは一言でいえども、アシュケナジーム、セファラディムなど文化的差異を持つ者、正統派、改宗派など宗教観を異にする者、同化主義者、シオニスト、マルクス主義者など思想が異なる者など多様化した状態にあった。各派にはさらなる派閥が存在しており、事態はよりいっそう複雑化している。また、19世紀末から20世紀初頭までは各活動が盛んになっていった時代であった。

また、近代化と共にユーゴスラヴィアに入ってきた、反ユダヤ主義も見逃すことのできない現象で、ファシズムの台頭が見られるようになる。急進的な政党が形成され、彼らのプロパガンダによって反ユダヤ主義は社会に広げられていった。1940年10月5日に新聞で初の法的規制、ユダヤ商店での食料を販売禁止、就学規制が宣言され、ユダヤ人の活動を政治的にも文化的にも苦しめた。シオニストは反ユダヤ主義からの自己防衛策として移住処置を採り、当時イギリスの任意統治領であったパレスチナへ移住し始め、少なからぬ国内のユダヤ人はキリスト教への改宗をみせていった。同化主義の傾向にあった国内のユダヤ人、マルクス主義の思想に加担したユダヤ人たちは、ファシズムの台頭で翻弄されつつも、第一次世界大戦時、第二次世界大戦時にセルビア軍に志願した。また、パルチザン活動が、彼らにとって生き延びる手段でもあった。そして、この戦時におけるユダヤ人の功績は、第二次世界大戦後の社会主義時代に犠牲者が英雄にとって変えられたことで、一般に認められるようになった。

20世紀初頭の経験、すなわち反ユダヤ主義により、彼らは逆説的にアイデンティティを見出し、常に他者から与えられた差異に影響されていた。ホロコーストの直接の犠牲者とその家族は、その事実を受け入れること自体が長年不可能であったし、自らと向き合うことに混乱が伴った。実際、近年連続して出版されているホロコーストの記録などを通じて彼らの声に耳を傾けてみると、やはり人生の一時期に起こったホロコーストに対する記憶が決定的に強調されており、そして、彼らのアイデンティティはホロコーストを契機とした非ユダヤ人との差異を強調していることに気づかされる。

第2章 旧ユーゴスラヴィアのユダヤ人文学者

1. 共産主義とユダヤ人文学者

1945年11月のユーゴスラヴィア連邦人民共和国の建国後、翌年に制定された連邦人民共和国憲法では、各共和国による連邦制が導入され、旧ユーゴ内の六共和国の平等、民族や宗教を越えた全市民の平等、少数民族の平等がうたわれていた。当初はソ連による指導を受けていたが、1948年にコミンフォルムから追放され、周辺の世界主義国家から孤立すると、国家体制の中心にチトー主義をすえ、独自の道を歩まざるを得なくなった。このことを背景に、旧ユーゴの芸術はソ連のモダニズムから多少遠ざかることとなり、一様でない文学作品が登場する。

共産主義の影響が国内に克明にあらわれ始めた19世紀後半から20世紀初頭にかけて、ユダヤ人の中にも同じく共産主義者が現れ、旧ユーゴのそれと活動を活発化させていった。ここでは、共産主義者としても知識人としても名高いモージャ・ピヤーデ (Moša Pijade 1890-1957) を取り上げたい。ピヤーデはベオグラードのドルチョル区で子供時代を過ごし、教育を終えた後、絵画などの芸術、ジャーナリズムにおいて才能を開花させた。第一次世界大戦が終わると、彼は共産主義の思想に魅せられ、1920年の1月1日から生涯をかけて労働運動の活動家となり、その同年にはユーゴスラヴィア共産党のメンバーに加わることとなった。しかしながら共産党の活動は当初非法であったため、1925年、彼はユーゴスラヴィア共産党の中央機関紙『コムニスト』(Komunist) の出版において有罪判決を下されると、国内の数都市での労役に処された。なお、労役の期間中、彼はマルクスの『資本論』などを翻訳している。そして、第二次世界大戦が始まり、1941年12月からピヤーデはモ

ンテネグロの反乱軍に参加、チトーのバルチザンのメンバーに加わる。こうして地位を得た彼は、後にユーゴスラヴィア人民解放反ファシスト会議 (Antifašističko veće narodnog oslobođenja Jugoslavije) にも参加し、チトー政権の中核を担う人物となった。共産党によるバルチザンは第二次世界大戦において国土解放を成功させ、戦後社会の中心を担う勢力となった。バルチザンの活動家は、民族の出自を問わず戦後、英雄にとって変えられたのであるが、モーシャも同様の扱いを受け、さらに政府の職を得ることとなった。彼は1954年1月28日から生涯を終えるまで、ユーゴスラヴィア連邦人民共和国の議長を務めている。そして、ユダヤ人の境遇を改善するように、彼らのイスラエルの移住をはじめとした政治的働きかけを行った。モーシャは戦前、芸術家、評論家として活動し、その後共産主義者に転向した知識人であった。

次にエリ・フィンツイ (Eli Finci 1911–1980) を取り上げたい。彼はサラエヴォ出身のユダヤ人であり、キャリアは同地の地方紙から始めている。そこで彼は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ文学界におけるユダヤ人の活動についていち早く注目し、論題に取り上げていった。そして第二次世界大戦後は、演劇評論家としてベオグラードで活躍し、『ボルバ』(Borba) 紙、『ポリティカ』(Politika) 紙で共産主義文化のイデオロギーについて執筆することで活躍した。特に、セルビアの演劇部門での活躍が目立ち、多くの脚本に影響を与えるほどの力の持ち主であった。そのほかにも、ユーゴスラヴィア文学界の重要な雑誌である『文学』(Književnost) で長年編集者を務め、文学の評論でも注目を集めていた。

フィンツイはマルクス・レーニン主義者として地位を得たのであるが、その後自由主義者に

転向したため、戦後のソ連指導下の国家体制においては活躍できずにいた。しかしながらユーゴスラヴィアがソ連支配から脱することになることで、それまでの自由主義者としての活動が認められるようになった。以前は評価を得られずにいた、独断的な思想でのマルクス主義への評論で注目を浴びた。それはマルクス主義の基本を論証し、ソ連の指導下で国家作りを推進することは、ユーゴスラヴィアの持ち前の資本を無視した不適格な政策の導入であり、国家体制が必然的に単純化、一方的な属性関係となってしまおうという主張であった。彼は体制転換により、よりいっそう評論家としての地位を確立することになった。

そしてエリフ・コシュ (Erih Koš 1913) を取り上げたい。彼はユーゴスラヴィアの社会問題をテーマにし、風刺を効かせた散文で、独自の地位をセルビア文学界に築いた文学者である。彼は第一次バルカン戦争と第二次バルカン戦争の時代、サラエヴォに生まれ、初等教育を終えギムナジアを卒業し、その後1935年にベオグラード大学の法学部を卒業した。ファシズムの波が押し寄せる時代、彼は1941年から、ボスニアとモンテネグロで解放戦線に参加し、バルチザンの指揮にあたった。第二次世界大戦におけるボスニア・ヘルツェゴヴィナのユダヤ人の状況は、1941年4月16日クロアチア独立国内のナチス・ドイツ傀儡組織であるウスタシャ (Ustaša) がサラエヴォなどの地域を占領したことで危機に陥った。ナチス占領下で起きたユダヤ人殲滅作戦がこの地において、現地住民同士により実行されたことは、なおさら悲劇であった。この地は以前からコスモポリタンを誇っていたのであるが、隣同士の民族による殺し合いの傷跡は、後の連邦崩壊まで痕を残すこととなった。

一方でその地域性は、ボスニア・ヘルツェゴヴィナの共産主義者によるパルチザン活動が多く、多くの支持者を集め大きな勢力となるような求心性も備えており、諸民族を抱え込むことで勢力を拡大したのであった。自ら志願して、または虐殺から逃れる手段として、パルチザンに参加したユダヤ人は多く存在する。第二次世界大戦を通じて、パルチザンに参加したボスニア・ヘルツェゴヴィナのユダヤ人の数は1406人にのぼった (Jaša Romano, 1980, p303)。サラエヴォからは約400人といわれている。実際にはカルミイ・バルフ (Kalmij Baruh 1896-1945) (後述) のように多くが虐殺の犠牲となってしまったのであるが、エリフ・コシュのようにパルチザンに参加したユダヤ人もいたのであった。また、サラエヴォ出身の文学者にイサク・サモコヴリヤ (Isak Samokovlja 1889-1955) (後述) が同じく参戦している。

解放戦線での活躍の後、彼はユーゴスラヴィア連邦人民共和国の文部委員会の議長に任命され、その後連邦政府の文部・教育大臣、時折外交官を務めた。キャリアを終えるころには、国立博物館の官庁補佐に任命され、1964年から1969年の間ユーゴスラヴィア連邦の人民平和・独立・平等部門の長官補佐役に就いた。その後、彼はプロの作家となりベオグラードで執筆活動を行うこととなった。

コシュの文章は、淡白で単調で感情が無く、また一定の表現方法をとらず、修辞法や文章技術に重点を置かない。また、パトスなどとも距離を置いた作品を書くというスタイルを取り続けた。初期の風刺空想文学は辛辣すぎるなどの批判もあったが、彼の作り出すファンタジーの世界へ多くの読者を導いていった。そして第二次世界大戦後、墮落した人間関係、精神病を主

題にし、嘲笑と鋭いアイロニーを巧みに操り、作品を書き上げていく。彼が綴る寓話は人間性が無く、エゴで埋めつくされ、そして人間関係における信頼性というものがない絶望の世界を舞台にしているのだった。彼の風刺作品は嫌悪感を与えるほどであったが、それがより一層読者のモラルを高める役割を果たしていった。こうして、戦後セルビア文学界の地位を得たのであった。コシュにはユダヤ人を扱った作品がわずかながら存在するが、ユダヤ人問題に関して深く思考が向けられたものではない。

2. 反共産主義体制とユダヤ人文学者

この章の最後として扱う、アレクサンダル・ティシュマ (Aleksandar Tišma 1924-2003) もセルビアのユダヤ文学を語る上では欠かせない存在である。彼は1924年ホルゴシュ (Horgoš) に両親とともにユダヤ商人の家庭に生まれた。ティシュマはノヴィ・サドで初等教育、ギムナジアを終えた。近辺住民の言語を話し、さらに母の教育方針によって幼少のころからドイツ語、英語、フランス語を習得した。その後1942年、ペシュトにある経済大学に入学したが、作家になることを志望していた彼はフランス語と文学を学ぶ。さらにザグレブで医学を、ベオグラードで芸術史をも専攻しており、最終的にはベオグラード大学哲学部ドイツ語学科を卒業した。

第二次世界大戦時初期はノヴィ・サドとブダペストを行き来する。ノヴィ・サドでは1942年に100人近くセルビア人とユダヤ人が虐殺される「冷たい日」事件が起きたのであるが、そこで彼はハンガリー人の理容師のアパートに身を寄せ、焼き討ちにより家を失ったものの、隣人の協力で命を落とさずに済んだのだった。しかしながら、1944年ハンガリーがナチス・ドイツに

占領されると、ティシュマらペシュトからの学生はトランシルヴァニアで排水溝を掘るという労役を課されるが、後に赤軍により解放されることとなった。

戦後、ノヴィ・サドへ戻り、『ノヴィ・サド解放紙』でジャーナリストの職に就き、1947年にはベオグラードの共産党の『ボルバ紙』に移ったのであるが、彼自身は共産主義思想に決して忠実でなく、自らを合理主義者として位置づけており、党系の新聞社で働くことは苦痛以外の何物でもなかった。

ジャーナリストとして働く中、ティシュマは小説家として認められるようになる。当初は、愛などをテーマとしていた。文章の特徴としては、どこまでも知的に物語の筋を組み立て、文章にはひとつの矛盾や不均衡さもなく、文体の音にも欠点がないことがあげられる。また、言語学的にも文法的にも誤りを見つけないことができないとされるほど、細部にまで注意が行き届いたものだ。この綿密さは登場人物の人間関係、役割分担、物語の筋、物の配置やその影、色、ムードにまでどこまでもみることができ、詳細の描写にまで意味が含まれている。なお、彼自身もそれを目標としており、言語、思想、正確さを求めている。

彼には戦争をテーマにした作品が多い。第二次世界大戦での経験は、彼に「アドルフ・ヒトラーより私のそばにいる人物はいない。(中略)我々に生と死、生残の条件を示したのは彼だからである。だから、『世界でどの思想家が私に一番影響を与えたか』と聞かれた時、『ヒトラーである』と言いたい」(Else Marie Leander Fog, 2001, p42)と言わせしめ、戦争の記憶は以後対面し続けた問題であり続けた。第二次世界大戦では、バルカン地域で隣人同士が殺しあうとい

う、異常事態が起きたのである。

戦争とユダヤ人に関する作品として、『ブラムに関する本』(Knjiga o Blamu) (1972)がある。これは昔と現在のユダヤ人の生活における矛盾をモチーフにし、あるユダヤ人男性が迫害から生き残ることにうまく対処し、しかしながらその結果、彼の記憶の中では一生囚人であり続けてしまうという物語である。そのほかの作品も、登場人物自らを根源とした苦痛を描き出している。特に他の旧ユーゴ出身の作家に比べ、激しいドラマ性、パトス、歴史に対する怒りなどが彼の作風には見られない代わりに、熟考された構成において、孤独による苦痛など各個人の神秘性を素晴らしく表現したのだった。物語性においても、独自の思考を発揮している。そのほかの著書の中にも、ユダヤ教の信仰を捨てたように振舞うユダヤ人など、ユダヤ人の様々な状況とその下での葛藤もテーマとなっている。

こうした作品が生まれたのは、ティシュマが60年代に出版社の事業の一環でアウシュヴィッツを訪れ、戦争について再考したことに起因する。彼の中で第二次世界大戦という事実を明確に認識し、事実を合理的に小説化する過程には、それほどに時間がかかった。パスポートの問題からハンガリーを訪れることが出来ずにいたのだが、この旅で戦後初めて当地に足を踏み入れたことも大きな要因の一つであろう。ティシュマはこの時間がまるで自らに対する裁判のようであるという感想を抱き、こうしたことをテーマとして文章を書くことを決意したのであった。彼は分離させられたいいくつかのアイデンティティと共存している。ユダヤ人として経験した戦争での疑問を自己に問いかけることをやめず、「自分は本当に他人と違うのか」「自分は一体何者なのか」といった哲学的問いかけは、様々

な人格となって各物語に登場していく。彼らはティシュマのこうした思想過程における幻影なのではないだろうか。

また、ティシュマは第二次世界大戦が終結しても、人々の中で戦争は続き、病的な社会で暮らしていると捉えた。さらに戦後のユーゴスラヴィアは独裁国家であり、共産主義の恐怖政治の下で、人々が回復する可能性がなかったとも述べている。

ティシュマは晩年、再び戦争と直面することとなる。旧ユーゴ解体、コソヴォ紛争である。

彼はミロシェヴィッチ政権が崩壊するまで反体制の立場を貫いた。そして独裁時代に生きた人々を憂い悲しみの眼差しでみつめ、怒りをこめて発言している。ユーゴ紛争やコソヴォ紛争で、民族主義を振りかざした指導者のために、セルビア国民が被ってきた戦争責任と、敗北という「押し付けられた過去10年」から自由になることを彼は願っていた。これはセルビアが民主革命を達成した後に一般化された意見であるが、その形成に一役買っていた知識人の一人がティシュマであった。しかしながら旧ユーゴが解体し、コソヴォ紛争までに至った経緯に対する理由を、ミロシェヴィッチのみに押し付けるだけでは、民主主義を手に入れ未来を切り開いていったとしても、過去の自らの意識に反省がないことが気になる。あるひとつの単純な自己弁護法に、一気に人々が群がるというのは、セルビアだけでなく、民族単位で敵対関係にある場合多く見られることである。ティシュマ自身はより深層まで理解していたのかもしれないが、彼のような知識人・文化人でさえも、このような過去との決着について、メディアを通じて理想を述べるにとどまり、国民に深く思考させる機会を持たせるには至らない。このような

ことは未だに火種を残しているコソヴォ問題を考える際、憂鬱にならざるを得ない。

しかしながらティシュマは文化人として、一連の紛争や経済制裁でセルビアの文化レベルが著しく低下したことに警鐘を鳴らすことを忘れてはいない。経済の崩壊でいかに国民の生活に余裕がなく、文化生活を取り戻しておらず、また社会基盤が据えられていない状態では本当の意味での民主化はまだまだ遠い、と言うのである。

ティシュマのメディアでの活動は、文学者の枠を超えて有名である。ところで彼の人生は、全体主義を否定し、非共産主義者であったものの、戦後共産主義体制の下で運命を共にしてきた。一方で戦後ホロコーストの犠牲者であるという恩恵を受けていたことも忘れてはならない。なお、彼のような存在は、ユダヤ教の伝統的な生活から脱し、無神論者として扱われる趣がある。

3. ユダヤ人文学の新勢力 ーダニーロ・キシュー

反ユダヤ主義は完全には解決されていなかったものの、第二次世界大戦後のユダヤ人の境遇は概ね良好であった。コミンフォルムを追放されて以来、旧ユーゴは親アラブ諸国の最前線を進んでいたため、中東戦争をきっかけに起こったデモや学生運動の対象になることがあり、この時期にユダヤ関係の建築物に落書き、破壊行為がなされ、多少反ユダヤ主義が再燃されたが、国家としてユダヤ人を法的に規制したということはなく、ユダヤ人は、文化、教育などの活動すべてを維持することが出来た。政府はチトー主義を全面に押し出して多民族国家をうたいあげ、潜在的には民族問題は存在していたもののその表面化はまれであった。こうした許容の時代において、新たなユダヤ人作家が誕生する。

セルビア文学界の戦後世代の、最高の評価を得ている作家として、ダニエロ・キシュ(Danilo Kiš 1935-1989)があげられる。彼は、スボティツァ(Subotica)にてモンテネグロ人の母とユダヤ人の父の間に生まれた。1937年にはスボティツァからノヴィ・サドに移り住み、1939年にハンガリーで反ユダヤ主義の法律が制定されると、彼は4歳の時に両親の判断で正教徒の洗礼を施された。彼は第二次世界大戦開始時、ノヴィ・サドで学生の子供であったが、1942年に同地で虐殺が起きるなど(先述)状況が悪化したことをきっかけに、田舎で住み込みの労働を始めた。この時代、キシュは学校で宗教を学び、ハンガリー語で処女作を書いている。こうしているうちにも戦況は悪化し、1944年には父を始めとして親類がアウシュヴィッツの収容所へ連れ去られ、帰らぬ人となった。1947年、赤十字により、歴史家であった母方のおじの住むツェティニエ(Cetinje)へ送還され、ギムナジアに入学し、1954年に卒業することになった。非常に優秀であったキシュは、執筆活動続け、独自にハンガリー語、ロシア語、フランス語の詩を翻訳して文体や言語を学んでいる。こうして作家となる努力を続け、ベオグラード大学に入学し、比較文学を首席で卒業した。

キシュは早熟であったようで、幼少時代の戦争の記憶、そして自身の性質から、内向的に熟考するようになり精神的な不安を抱えて育った。すなわち第二次世界大戦での悲劇的経験、複雑なアイデンティティ形成、過敏性、内向性、内省、パトスに欠けた主なヴィジョンは、キシュ自身のルーツであって常に作品に横たわることとなった。さらに彼は、夢や幻覚などといったものと思いを絡めることで、作中では独自の世界を作り出すことに成功している。

キシュはまた、自身の断固とした個人主義により、一般性というものには一切従うことがない。それまでの主な文学手法であった古典的リアリズムから抜け出し、彼の思想、文学に関する博学さ、徹底的に計算されて組み立てられた文章は同時代の作家を寄せ付けない完成度にある。そんな彼の初期作品は、悲しみ、悩み、理性を奪われた個人的な不幸による憂鬱さにあふれており、後に迫害、暴力、不正、絶滅のはびこる「不名誉の歴史」として現代史を捉えることで、辛辣な文章をつむいでいった。この時代の作品には、キシュの人間に対する興味が見て取れ、様々な人間の心理を見事に描き出している。

彼の文学は、フィクション小説の水準に歴史基盤を格上げしたものが多い。旧ユーゴのユダヤ人のホロコーストをテーマに取り上げ、キシュ自身の苦しみの経験を背景にしたものである。『若き日の哀しみ』(Rani jadi 1970)ではキシュの父をモデルにし、第二次世界大戦時に一家ごとアウシュヴィッツに送られることになったヴォイヴォディナ地方のユダヤ人を紹介している。『ボリス・ダヴィドヴィッチの墓』(Grobnica za Borisa Davidoviča 1976)では、ナチズム政権とスターリン政権の両者において、キシュがいかに思想的にも物理的にも支配され、傷つけられ、自由を奪われたかという経験を表しているかのようである。しかしながらキシュの作品は歴史小説にあらず、文学が歴史を所有する、文学が役割を決定するという文学主体のスタンスにある。物語に歴史をうまく導入、描写しているのだ。

キシュは中年を迎えるとフランスに移り住み、作家活動を続けた。ストラスブール、ボルドー、そしてリールでセルボ・クロアート語と文学の講師と翻訳活動をしながら執筆活動を続

け、最終的にはパリに定住した。そこで彼は、バルカンという場所が、偏狭文明に属しているという意味を本当に知り、後に打ち明けた。パリで彼のユダヤ人であることに感じていた苦さというものは和らいだかもしれないが、同時に出自を自覚することになった。

キシュがフランスに移り住んだ理由として、バルカン的なもの、ローカル文化に自らが支配されている現実から脱し、ヨーロッパ的な文化的・精神的な生活で自らを問い直してみたかったからではないか、その上で自らの作品をより充実させたかったのではないか、という視点があげられる。事実、彼はパリでの生活において、文化、習慣、言語などの差異との葛藤を経て、ヨーロッパ文明の中に自分を置き、そこで手に入れたものを物語に取り込んでいった。

キシュはそれまでの旧ユーゴ出身の文学者とは思想のあり方が違った。文学者として呼ばれる際、全体主義に抵抗し、マイノリティーに組み敷かれることも避けたのだった。何かの分類を受けることは文学に対する閉鎖的な態度であるとし、「ユダヤ人文学者」とカテゴリー化されることも拒否した。キシュの出生がユダヤ人であるが故に経験したことは彼の文学のテーマで取り上げられており、さらに自らに対する評価の一部がそれに依存しているものの、自らの文学作品をいかなるセクショナリズムの範疇に置くことを承諾しなかった。また、こうしたことは実際その跳びぬけた物語性から、彼の文学に「ユダヤ人文学」というセクションを設けること自体がもはやその作品を正確に評価する指標たりえなかった。

一方でこのことはキシュがユダヤ人として出生し、旧ユーゴに生きた事実を否定するものではない。セルビアでもクロアチアでもない、ユ

ダヤでもない「ユーゴスラヴィア」という枠組みであれば、「ユーゴ文学」として自身の作品を捉えられることは承認している。言語に対する認識としては、セルビア語以外に自身を表現する言語はないと断言し、晩年すごしたパリでも同言語による執筆活動にこだわり続けた。共産主義体制の支配を受けずに、独自性による地位を築きあげたキシュは文学界において新星であった。彼以降、キシュの歩んだ道を辿るように、新時代の思想を持った文学者が登場する。

ところで、ダニーロ・キシュ、アレクサンデル・ティシュマ、エリフ・コシュなどを始めとし、多くのユダヤ人作家が20世紀のユーゴスラヴィア文学の巨匠として国内外から名声を得た。セルボ・クロアート語でのユダヤ文学が認められ、文壇で多くの論争に参加し、また文学界を指導していく立場にもあったのだ。彼らの功績は『文学』など文学雑誌で定期的に取り上げられるなど、同国の文学界に大きな影響を与えていく。

第二次世界大戦時に少年時代をすごしたユダヤ人世代は、戦後共産主義体制下でその才能を開花させた。体制による恩恵によるものであれ、それに対する反発であれ、それぞれに立場を異にしつつも、その自由な文化基盤において、各文学者は独自性のあるユダヤ人文学を生み出すこととなった。チトー主義が顕在化したころの社会主義時代の代表的な文学者はその権利を享受し、ユダヤ性に回帰することも出来、新たな思想を受け入れ、旧ユーゴの文学界を先導していくまでに登りつめた。戦後共産主義時代は文化的に黄金時代を迎えたのであった。

4. イヴォ・アンドリッチとユダヤ人文学者

旧ユーゴの作家の作品にユダヤ人が登場することもあり、著名なところで言えば1961年『ド

リナの橋』(Na Drini Čuprija) でノーベル賞を受賞した作家、イヴォ・アンドリッチ (Ivo Andrić 1892-1975) のものがそうである。彼はボスニアのトラヴニク (Travnik) で生まれ、ザグレブ、ウィーン、クラクフなどの大学で文学と歴史を学び、第一次世界大戦後、グラーツ大学で博士号を取得している。政治的活動としては、反体制運動「青年ボスニア」に参加し、サラエヴォ事件の責任を問われて第一次世界大戦期に獄中で過ごした。その後、外交官として働いていたが、第二次世界大戦期にベオグラードへ戻ることを余儀なくされ、当地で執筆活動を行うこととなった。彼は、ムスリム、カトリック、正教、ユダヤ教で構成された、多民族が共生するボスニアをこよなく愛し、リアリズムの手法でいくつもの作品を書き上げた。また、自らの幼少期からのその経験を元にした、ノスタルジックな短編も残している。

アンドリッチは晩年、ユーゴスラヴィア・ユダヤ人コミュニティの発行する『ユダヤ年鑑』(Jevrejski Almanan) に連続して寄稿し、彼の作品も部分的に紹介するなど、多民族共生の思いを発表している。

アンドリッチはその他の作家よりもよりよくユダヤ人を描き出し、そして彼らのメンタリティーに至るまで鋭く言及していると評価される。まず始めの例として、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ出身のユダヤ人文学者イサク・サモコヴリャを取り上げたい。彼は人格的にも評価の高い医者であった。彼は第二次世界大戦時、バルチザンに参加して国土解放戦線に加わり、生き残った。ちなみに、同時代のユダヤ人作家であるエリフ・コシュの印象では、サモコヴリャは人生に喜びを見出せず、また戦争を体験し生き残った彼にはその権利がないかのごとくに思っ

ている節があるのではないかと想像している。

サモコヴリャの文学は、ユダヤの伝統を現地語で書き上げるというものであった。ボスニア語で表記していたものの、彼は精神的にはユダヤの伝統主義者であると自覚していた。こうしたことから彼の作品には、信条の基準の不当性などに対する反逆的な思想を見ることが出来る。アンドリッチはサモコヴリャの文学を読み、理解する中で、彼のアイデンティティには喪失があるとし、その原因を言語を巡る環境に求めている。シナゴークではヘブライ語、家庭ではラディノ語、そして周辺住民とはボスニア語を話すことを強いられたとすれば、どこに彼は言語的帰属意識を持てばいいのかといった観点である。しかしながら一方で、セルボ・クロアート語を完璧に習得し、なおかつ豊かな表現力で作品を書き上げることは、ユダヤ人の可能性を一層伸ばしたとも評価している。アンドリッチにとってユダヤの習慣は、同じ言語で書かれた文学作品であれ、非常に興味深かったものに違いなかった。

そして、アンドリッチがユダヤ人文学者と親交が深かったことも、彼の寄稿から知ることができる。次の例として、K・バルフを取り上げたい。バルフは、スペインへ何度か留学経験を持ち、セファラディムの伝統を専門分野としてマドリードのロイヤル・アカデミーと交流をはかったユダヤ人文学者である。こうした背景によって、彼はサラエヴォのユダヤ人コミュニティにおいても、翻訳分野で突出した成績を残した人物となり、多くのスペイン文学に対するエッセイ、評論を書き、翻訳を完成させている。そして、ラディノ語の伝統とセルボ・クロアート語の文化を融合させることに対しても、熱心に取り組んだ人物であった。なお、セルビ

アにおいて近代ヒスパニック学の基礎を築いたのも彼であり、そのように学問の進んでいなかった同分野を普及させ、また、バルカンへのユダヤ人移民をもたらすこととなった。

アンドリッチはバルフに対してシンパシーを見せており、上記の活動も評価していた。2人は故郷を同じくし、ヴィシェグラード(Višegrad)で幼年期を共にしている(アンドリッチはバルフの兄と学校が同じであった)。そしてそれぞれに第一次世界大戦を過ぎ越し、新体制の元で1928年から一年間、外交官として共にスペインに滞在し、交流を深めたのであった。

結局、バルフはナチスの強制収容所でその生涯を終えたのであったが、ここで彼へのアンドリッチによる個人的な思惟を少しばかり紹介したい。アンドリッチはバルフのスペインへの博識さと、その人物像に対して肯定的な思いを語っている。特に、スペインの都市を巡ったときのアンドリッチの考察は面白く、自らのスペインの印象とは違った、バルフのノスタルジアに駆られた姿に言及している。それはすなわち、互いに同じバルカン出身の身であれ、セファラディムであるバルフには当地に対するロマンがあり、先代の時代に思いを馳せているのではないか、そして自らの少年時代を回帰しているのではないか、といった心情の対比から始まる。ユダヤ人の住居の影も形も残さない名前ばかりの「新ユダヤ通り」を発見した際のやるせなさ、バルフがスペイン人の子供とのユダヤ人を話題にした会話へのアンドリッチによる観察は(Ivo Andrić, 1960, p213-215)、1928年のような時代に、このような考え方を育んだボスニアの環境のためであるといえるのであろうか。ほんの些細な言葉や出来事を見逃さず、ただのロマンだけに求めない彼の視点は、歴史や情勢を巧みに

考慮しながら、バルフの心をも汲み取っていたのである。

アンドリッチを育んだ時代とボスニア・ヘルツェゴヴィナの環境は、他にも多くの優れた文学者を生んだ。こうした多文化の時代に生きた多くの作家は、今では失われてしまった旧ユーゴの良き時代(とノスタルジックに言われている)を反映した作品を残している。

第3章 ユーゴ紛争とユダヤ文学

1. ユーゴ紛争とユダヤ人のアイデンティティ

ホロコーストを直接経験しておらず、歴史を再認識した新世代の文学者について取り上げたい。彼らのうち多くが戦後歴史教育によるホロコーストの記憶を、非ユダヤ人と共有するようになった。記憶の希薄化はユダヤ人を一層大衆化させた。また、多民族共生主義を基礎に据えた戦後教育は、一時的に民族感情を抑えることに成功したと評価された。一方、時代の移り変わりとともに、チトーによる独裁が明るみになってきているのも事実で、民族主義が解決されたわけではなく隠蔽されてきたという指摘がされるようになった。たとえ反ユダヤ主義的事件が起きようとも、周辺民族とユダヤ人が問題の本質に突っ込まずして表面的に解決を試みてきたことは予想できる。多くのユダヤ人がチトー主義を自らの体内に取り込み、旧ユーゴの国民として生きることは、全体主義による個人の組み換えの結果、思考の停止を生じさせていたのではないか。

またユダヤ人の立場が、ホロコーストを歴史的に学んだ非ユダヤ人からの罪の意識によって成り立っている。多くの非ユダヤ人にとってもホロコーストはトラウマであり、「ユダヤ人」という言葉に対して捨てきれない否定的意識が存

在している。

このように、ユダヤ人側にも非ユダヤ人側にも、歴史の再認識が感情を伴って行われ、様々な立場を生んできたのである。新世代の誕生によるコミュニティ内の根底からの変化は、戦後世代はもはや第二次世界大戦の経験とは断絶状態にあり、ユダヤ人の伝統は博物館で見学するものであるといった現状を生んでいる。忘却と再生による歴史認識の修正行為は、特に世代交代が起きる上でその根底にある本質がわからないまま行われやすい。右派左派あらゆる立場の組織から扇動的出版活動などがまかり通り、受け取る側もその信憑性を疑うメディアリテラシーが欠けている状態では、非常に頼りない社会が形成されてしまう。

ところで、ユーゴ紛争でユダヤ人が果たした役割は、対紛争面においては様々なユダヤ人コミュニティ間との連帯や、反セルビアの立場をとる西側の知識人との協力関係などであった。国際的なユダヤ組織からの援助や、紛争地域に住むユダヤ人に対する救援なども行われた。一方で、セルビア国内の反民族主義勢力との協力関係も結んでおり、吹き荒れる民族主義に対する反対活動なども行った。あらゆる立場のユダヤ人が、ユーゴ紛争に何らかの形でかわり、それらユダヤ人組織の活動は多岐にわたっていた。

当時旧ユーゴ内のメディアは、知的リソースを有さない偽りの学者が、民族主義に基づいた歴史認識によって他民族の領土に侵攻する権利を主張する舞台と化していた。こうした扇動による民族主義の高揚によって、反ユダヤ主義的なプロパガンダや書物が出版されるようになり、落書きや、破壊行為が行われたのである。しかしながらこうしたことは、旧ユーゴの民族

主義が台頭する中での、自民族以外に対する排他的態度の対象の一つにあって、差別対象はユダヤ人に特定された現象ではなかった。また、旧ユーゴ諸社会の持つ心的傾向に、単純にこうした排他的な民族主義の拡大と、自民族による結束が容易に行われ得ることも、しばしば政治情勢の悪化と同時に起こる反ユダヤ主義の現象と関係している。

反ユダヤ主義はユダヤ人のアイデンティティが再確認されるきっかけとなったのであるが、実はこのユダヤ人のアイデンティティには、戦後の旧ユーゴの共産主義思想のみならずマジョリティーの歴代の思想的影響が大いに関係しており、彼らによって啓蒙された面も無視できない。歴史的に、ユダヤ人の権利拡大とユダヤ性の保存の過程において、セルビア社会から得た思想的背景は、多くのユダヤ人の思想でもあったのだった。文学がセルビアで認められたのも、相互の親近関係があったことが重要である。ユダヤ性が認められるのは戦後チトー主義の受容の結果でもあった。セルビアが持つ社会的排他性の他に、受容性もその特徴として特筆に価するが、後者における環境が、完璧なバイリンガル、セルビアの思想に影響を受けた多くのユダヤ人作家を生んだのであった。

旧ユーゴが崩壊する過程で、ユダヤ人は主要民族と同じく祖国を失ったといえる。こうした喪失感、社会主義時代へのノスタルジアと交じり合って、もはやユダヤ人という特定民族の枠組みだけでは捉えられない。特にこの地域のユダヤ人が、ユダヤ性を保ちつつもセルビア社会のメンバーの一員として自己意識を保ってきたことが原因であるが、ここで一人の作家を例に挙げ、どのようなものであったか確認したい。

2. ユーゴ紛争とダヴィド・アルバハリ

ダヴィド・アルバハリ (David Albahari 1948) はコソヴォ第二の都市ペーチ (Peć) に生まれたユダヤ人である。小学校に入学する時分にベオグラードのゼムンに引越し、学業を続け、1966年にゼムン・ギムナジアを卒業した。その後ベオグラードの教員養成大学を終了し、25歳で小説『家族の時間』(Porodično vreme 1973) でデビューしている。

常に、自分の内面と向き合い、自身の変化を敏感に感じ取り、またそれが作家のあるべき姿であるとするアルバハリの小説は、彼の伝記かのようなことが特徴だ。初期の小説では、ゼムンでの自らの少年時代と家族のあり方を回顧した「家族の時間」が有名だ。それはアルバハリの良好な家族関係に基づきつつも、第二次世界大戦での不幸により両親の人生観にひとつのピリオドを打ったという背景が、根底に流れ続けている作品である。あらゆる対象を彼の感覚で浮き彫りにし、作中では希望、人生、死などをテーマに物語っていく作風が確立された。また一つの特徴として、アルバハリは作中において、テーマとなっている問題の結論を出さないようにしている。哲学を語るのではなく、哲学を読者に考えさせるような問題の提示のみ行われ、「小説は読者のために書いているのではない」(David Albahari, 1998, p1074-1080) と言い切っている。

アルバハリは第二次世界大戦後のリアリズム文学を受け継ぎつつも、新世代が生み出したジャンルと表現方法を取り入れ、そして彼の卓越したイマジネーションを開放することで、先代とは違う位置に存在することに成功した。アルバハリの文学はセルビア文学界における新時代の幕開けであった。旧ユーゴの歴史と照らし

合わせてみても、彼の成長期は新時代とともに始まり、成熟期は安定と不安定を露呈している。作風として、キシュは攻撃的な表現で残酷なイデオロギーをその作品内で披露していたが、アルバハリはそれを消化した上でさらに孤独に抑圧された心の闇を暴露するのである。その闇はどこまでも深く、無希望であることは嫌悪感を及ぼさせるほどだ。

注目すべきことに、「ロック文化」にアルバハリは最も影響を受けたとしている。世界中で起きたロックブームの享受者は彼の世代にあたり、個人的嗜好のみならず社会の発展段階に即して旧ユーゴ全土に影響を与えていた。アルバハリは芸術の消費者の一人として、この文化を取り入れ、その世代の作家であることを自覚している。芸術はどこかで既出のものを破壊するの必要があり、このカウンターカルチャーの魅力は、彼らの世代を捕らえていたのだった。こうしたロック概念は、アルバハリが既存の文学界にとどまらず、さらに一歩抜けだすきっかけを産んだ。

アルバハリは第二次世界大戦時のナチス・ドイツによるベオグラードの強制収容所についての歴史研究を基にした『ゲツとマイエル』(Götz i Majer 1998) を発表した。この小説は歴史的事実の追及によるもので、これまでの著作にはない新しい方法であった。ユダヤ人の置かれた立場に対峙する態度もみられ、彼にとってユダヤ人であるということは、第二次世界大戦後に生まれ、民族主義から解放された社会として捉えられていたベオグラードで学生時代を過ごした彼にとって、残酷な運命ではなかった。この点において彼は、キシュやティシュマなど先代に比べ、ユダヤ人アイデンティティに関して違った認識を持っていた。キシュが「ユダヤ人

作家』と呼ばれたならば、反抗していたに違いないとした上で、アルバハリはキシュとは違うユダヤ人としてのあり方を提示し続けている。アルバハリにとって、ユダヤ人であることは自らの偶然を伴った要因であると同時に、もしも他者から色眼鏡を通して見られることがあったとしても、そむくものではあらずして、個人が外面的に加えられる些細なことにすぎないと考えているのではないか。彼は作家生活において、ユダヤ人をテーマに多くの作品を発表してきたし、ユダヤ人としての姿で常に存在し続けた。彼の中のユダヤ性というものは、他者の民族性に対する感覚とさして変わらない。

さて、人間の内なる心を語ることで逸脱した才能を見せて地位を得た彼ではあるが、1995年に発表した『雪だるま』(Snežni Čovek)で、セルビア文学史において一つの主題を提案したと考える。この作品で、ユーゴ紛争により祖国を失ったことで喪失感に駆られるユダヤ人男性の姿を巧みに描き出したことは、実際に1994年にカナダに移住することとなった彼自身の経験に基づいている。ユダヤ人であることと同時に、旧ユーゴに帰属意識を持つ2重の構造は、旧ユーゴを構成していた他民族にも少なからず該当し、それを巧みに描写しているのだ。紛争当時、彼はしばしば自らが夢の中で生きているといった発言をしている。確かに旧ユーゴで起きた出来事、自らが生まれ育った国がもう存在しないのは、夢のようであるように感じるかもしれない。存在の不在が、自らを堂々巡りの思考に陥らせている。

ダナス紙のインタビューに以下のように答えている。「私の国、それは昔そして今でも私の母国である。現在のセルビア・モンテネグロと呼ばれる国もそうであり、私の軌跡、私の本質

をなす私の一部であることも確かだ。もちろん、私は戦争の記憶から解放されてはいない。しかしながら小説を書くことは、それを見直すことになる。すべての人間は平和に暮らすことを望み、そして多くの人間が心に傷をおって生きている。我々はその傷を自ら解放してやらなければならない。しかしながら、これを終らせるためのプロセスは無駄であるとする。喜びなき人生は無益なものであるのだ」(Danas Vikend, 20-21. mart, 2004)。小説『雪だるま』は、自叙伝ではなく“自らをどのように形成するか”という人生の過程を読者に認識させ、生きる努力を示唆する物語なのである。アルバハリのこうした矛盾に関する発言は、その無駄な行為の中にこそ自身の人生があるという自覚と、彼ほどに解放過程での苦しみを経験し、観察した上での結果である。過去を考慮せず未来へ進むことの出来る者は、時間を無駄にせず進むがいい。しかしながら、私の小説において無駄な時間を共有することの出来る個人は、答えを探して悩みましょう、というメッセージが含まれているのではないか。

「私は未だに過去に驚いており、そのことで時間を無駄にしていることは確かである。しかしながらすでに10年暮らしているカナダではよい生活を送っている。そしてそれは私の運命の場所でない場所にいるからである。もちろん、そこは私の場所であるかのような感覚を持つ。しかしながらそれは自身の特徴の一部を捨て、失うように強制されている時に感じるものなのである」(Danas Vikend, 20-21. mart, 2004)。ユーゴ紛争に翻弄された多くの一般ユダヤ人の立場としては、どの民族に対しても肩入せず、主要民族間の民族主義にあってはあくまで蚊帳の外にいた。しかしながら、旧ユーゴが彼らの土

地でもあったため、主要民族と同じように故郷を捨てざるを得なかった者も存在し、自分自身の内部で何かを喪失するという経験をしたのであった。

ところで、ユーゴ紛争後の彼への評価はセルビア文学界で一致しておらず、様々な読者を獲得している。これはユーゴ紛争をいかに捉えるかという、未解決の論争の影響を受けているためである。

旧ユーゴに生まれ育ち才能を開花させ、その後体制転換によって避難民となった作家を捉えるには、彼らを取り巻いた政治を理解せねばならない。彼はインタビューや作中において、紛争でいかに人間が傷ついたかという問題を非常に積極的に議論している。ひとつの国がなくなり5つの共和国が生まれた歴史的事実よりも、旧ユーゴ出身の人々が紛争で身を切られるかの思いを体験し、自身を喪失し、状況を把握できずにいることに対する配慮がその意見の根底にある。アルバハリは「いつか私は自分の体が5つあるとは感じていた。しかし、それぞれの国にはそうは感じない人も存在し、私はそれも理解できるのだ。もしかしたら、国に対する自分の体の感覚と、自分自身の体の感覚において、何かがおかしいという感覚によって、私はカナダに行くことを決めたのかもしれない。」(David Albahari u Pragu <http://www.makabijada.com/pragfest.htm>)と発言している。カナダではあらゆる違いに驚きつつも、両者の文化性の存在を否定しない彼の態度は、あらゆる人々には決して普遍的なことではないものの、ユーゴ紛争を経た彼に言わせると重みがある。新天地においても再び思考をめぐらせることになった彼は、新たに発見したテーマから積極的に問題提示を、執筆活動を続けている。

直接経験した歴史に対して反抗するのではなく、認識の問題として歴史に取り組むことができるようになった第二次世界大戦を経験していないユダヤ人新世代は、新たな文学を生み出した。アルバハリ個人としてはユダヤ人としてのアイデンティティを持ちながら、旧ユーゴが生んだ多民族共生主義の理念を継承し、さらに国の崩壊から他民族と同じように魂を奪われる経験をしている。こうしたアルバハリの文学は、彼の個人的問題意識のみならず、旧ユーゴの亡魂の表れのようなものであろうか。旧ユーゴに想いを寄せる者にとって、「自らがどこに属するか」という葛藤は主要民族のみならず、ユダヤ人、はたまたその土地に帰属意識を持っていた者にとって共有するものののだ。

展望 旧ユーゴのユダヤ人文学

1. マジョリティーによるユダヤ人文学の評価

ユダヤ人文学者の作品が批評される際、彼らの歴史経験とアイデンティティは評論家の重要な観点の一つとなってきた。人間の普遍性をテーマにした小説でさえ、主人公の行動・思考はユダヤの習慣に起因するように追及され、マジョリティーのユダヤ人に対するステレオタイプのイメージの根深さを露呈している。

19世紀後半から積極的にセルビア文学界に参入したユダヤ人作家は、セルビア語の習得と共にマジョリティーによる国民国家の概念を取り込み、構成民族の一部と化した。伝統主義者、シオニスト、同化主義者など、ユダヤ人の中にも様々な見解を持ち活動する者が現れることで、その思想にかなった文学も登場することになったのであるが、第二次世界大戦以前はそうした文学が高評価の対象になることは難しかった。戦後には共産主義思想の元で、多くのユ

ダヤ人作家が成功を収めるに至った。反ファシズムは、共産主義の存在の前提であったことから、ファシズムの犠牲者であるユダヤ人は、新体制のイデオロギーを肯定し、広めるために評価されたのだった。また、多民族共生主義はもちろん、戦時中に活躍したユダヤ人の英雄化、ホロコーストの犠牲者としての恩恵、マジョリティーによるユダヤ性への興味と承認、そして単純に文学者としての才能がその他の理由として挙げられる。彼らの文学が受け入れられた最大の理由として、彼らの人間に向けられた普遍的思想が、旧ユーゴ共通のものだからだ。なお、反体制の思想を持つ者は、その評価対象に入らなかったことは言うまでもなく、政権交代後に彼らの文学は評価を受けることもしばしばであり、日の目を見るといった事態も起きた。

2. ユダヤ人のアイデンティティ問題

この地域のユダヤ人文学者にとって、ユダヤ人としてのアイデンティティや言語の問題は個人レベルで解決されつつも、生活面で周辺から与えられる文化や思想に大いに影響されてきた。影響を受けつつも、ユダヤ人文学者が持つユダヤ人としてのアイデンティティは、多くの場合周辺住民と同化傾向を見せつつも失われることはなく、彼らの思想を構築する最も重大な要素であることは間違いない。大抵は自身のユダヤ性は保ちつつも、時代ごとの思想と流行に基づいた文学活動に専念していたといえる。彼らは新しく生まれる思想や学問に敏感であり、その都度ユダヤの伝統的な戒律を思想や政治活動の象徴にとって変えてきた。そして、マイノリティーであるがために、自らの運命を左右するマジョリティーの思想傾向に注意を払うことは必然で、利害が一致した場合、政治運動に参

加するのは生き残る手段であった。国家体制の変化による影響は決して軽視できず、特に第二次世界大戦でのホロコースト、人民解放戦線への参加、戦後体制における経験は、それぞれユダヤ人の転換期となり、思想的にも変化を及ぼしてきた。

特に、マルクス主義がその一つであったし、それに対する個人の内部におけるアイデンティティを作り上げ、諸民族多数派と区別できないほど個人を世俗化させたのであった。セルビア社会のメンバーとして、セルビア人でもあるという二重のアイデンティティを持ちえた彼らは、民族のモザイク国家と呼ばれた旧ユーゴの求心作用に強くひきつけられていたのである。そしてその許容範囲は非常に広く、様々な傾向のユダヤ人をも取り込んでいったのだった。

ところで、ユダヤ人のアイデンティティには他者からの視線が大きく関わっている。すなわち、差別経験(特に第二次世界大戦期)から生じた、「自分と他者の違い」に関する問題意識が、アイデンティティの形成に大きく関わっているのである。そしてユダヤ人文学者は、その問題意識から物事に対する深い思想を導き出し、文学として大成させた。この傾向が最も現れているのは、言うまでもなく戦後世代であり、多くの文学者にはユダヤ人としてのアイデンティティよりも、何か超然とした人間観が作品の根底に横たわることとなった。当時、ユダヤ人のアイデンティティについて、ユダヤ人コミュニティーにおいても議論されることがまれであったことも注意しておきたい。

また、セルビア社会に適応していく過程には、言語を通じたアイデンティティの変容が大きな役割を果たしている。家庭で使用される言語も、次第にラディノ語やイディッシュ語からセルビ

ア語へと移行をし、特に第二次世界大戦後はセルビア語で表現することが、彼らの意思を伝える最も適した手段となった。ユダヤ人による著作活動が、自らが最も知る言語で、自らの精神を最大限に表現しうるのは、やはり母語であろう。それは日常言語ではなくなったラディノ語、イディッシュ語、ヘブライ語では有り得ない。そして、個人がユダヤ人としてのアイデンティティを語るのは、個人が使用する言語であっていくらヘブライ語を駆使したところで、その土地の文化的背景をすべて表現することは困難であろう。また、このことは完全な同化をもたらすことを意味しない。多くの作家が、セルビア語で執筆しつつも、ユダヤ性というものを失ってはいなかったことがその証明である。ディアスポラ後の土地にあるものが、彼らにとっての基準であり、そこにこそユダヤ文化が存在するのだ。

母語として習得した言語も、そういった意味で個人の基本的な構成要因の一つであり、皮膚のようなものである。また、セルビアにとってもユダヤ人の存在は「外国人」ではなく、必要不可欠な相互関係を築き上げてきた。セルビア文学界の発展において、ユダヤ人文学者が果たした役割は決して少なくなく、またセルビア文学界の一つの特徴として、ユダヤ人文学の存在は無視できないのである。

ところで、各文学者の思想上の立場は異なっていようと、それはそれで支持基盤を得ることが出来たことは、旧ユーゴの寛容さを現していると言えるかもしれないが、結局のところ、文学者たちが旧ユーゴを介した思想傾向により支配されていたとする方が妥当であろう。歴史的背景と彼らの文学作品を照らし合わせてみると、その時代の思想が反映されていることは明

らかである。一方で、こうして思想に支配されるという構図を、文学者自身が打ち破る努力を忘れてはならない。特に戦後国家体制が落ち着きを見せると、宗教や伝統にとらわれない、国際的で自由な思想を取り入れようとした動きが見られるようになった。

その後、共産主義体制が崩壊し連邦が解体されると、ナショナリズムはよりいっそう自覚的になり、文学評論においても「民族」に注目する傾向が強くなった。これはユダヤ人文学に関しても当てはまり、文学作品としての評価と同時に、ステレオタイプのイメージでカテゴリー化された文学作品のあり方が採られている。ユーゴ紛争によって社会のあり方が根底から変化し、共産主義時代に築かれた個人の思想も転覆することとなった。この事態に際して、体制に順応していたユダヤ人の多くは、共産時代を共に経験した主要民族の同世代として、同様の喪失感に見舞われた。こうした経験はユダヤ人特別なものではなく、旧体制支持者や思想を享受し生きた者達に見られる共通した感情で、ユーゴ紛争後のユダヤ人文学について考察するにあたって考慮せねばならない点である。これらのことは、もはやユダヤ人文学というカテゴリー化の非順当性を示している。しかしながら同時に、紛争におけるナショナリズムの高揚により、文学作品の背景にユダヤ性を期待されるという矛盾を生んだ。この現象は非ユダヤ人のみならず、ユダヤ人文学者のなかにも存在していると考え、ユーゴ紛争後のユダヤ性の再発見作業にそれは現れている。

第二次世界大戦後生まれた新世代のユダヤ人文学者は、先人達が悩んだユダヤ人の差異を乗り越え、ユダヤ性の再確認作業にあたっている。この差異は、ホロコーストの犠牲の結果だから

当然である。むしろ注目すべきことに、新世代によるユダヤ性の確認作業が、自らの差異化が伝統文化などの固有性によるものであり、必死に差異を乗り越え普遍性を追求しようとした共産主義時代に活躍した旧世代のユダヤ人作家とは違うことだ。新世代にとって旧世代が体験した差異は、どこまでも想像上のものでしかない。

今後セルビアにおけるユダヤ人文学の傾向は、マジョリティーのステレオタイプ、またはユダヤ人自身による想像上の歴史経験によって、ホロコーストという過去の悲劇の中で考えられるものでありつつも、その歴史経験にアイデンティティが見出されなく、新たなユダヤ文学の追求がなされるであろうと考える。それは、もはやユダヤ人であることにアイデンティティを求めることが、彼らにとって安定をもたらす要因ではなく、より一層広い世界の一部となりながらも新時代に沿った自らのあり方を発見していくことになるだろう。こうしたことから、ユダヤ人文学者は歴史の代弁者であった時代から、新しい思想を提示できる存在に変貌することが期待される。

補注

- 1) 旧ユーゴ時代における言語総称。ユーゴ紛争で連邦が解体するまで一つの言語としての取り扱いを受けた。実際はセルビア語、クロアチア語、スロヴェニア語、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ語などを包括しており、それらは方言的差異があった。小論はこの定見を踏まえて言語の記述を行う。
- 2) ユーゴ紛争を経て、セルボ・クロアート語が、各共和国の言語に分かれた。これら言語は方言的な差異はあるものの、言語学的に南スラヴ諸語に分類され、住民の相互理解の範囲内にある。連邦解体後、各共和国の言語は差異化傾向にある。なお、旧ユーゴ建国時以前からセルビア語、クロアチア語という呼び方は存在していた。

参考文献目録

【邦語文献】

- 伊東孝之+直野敦+荻原直+南塚信吾監修『東欧を知る事典』平凡社 1993年
滝川義人『ユダヤを知る事典』東京堂出版 1994年
ダニロ・キシユ著 山崎佳代子訳『死者の百科事典』東京創元社 1999年
プレプク・アニコー著、寺尾信昭訳、『ロシア、中・東欧ユダヤ民族史』、彩流社、2004

【外国語文献】

- Aca Singer, Položaj Jevrejske Zajednice u Jugoslaviji, Savez Jevrejskih Opština Jugoslavije, Beograd, 1996
Ana Šomlo, Između istorije i fikcije: proza Danila Kiša, Književnost9-10, p1785-1788, Beograd, 1998
Aleksandar Tišma, Dnevnik 1942-2001, Beograd, 2001
Avram Pinto, Jevreji Sarajeva i Bosne i Hercegovine, Sarajevo: Veselin Masleša, 1987
Danilo Kiš, Bašta, Pepeo, Beograd, 1972
Danilo Kiš, Moja je ličnost skrivena među stvarima, Književnost 5-6, Beograd, 1996
Danilo Kiš, Rani Jadi, Novi Sad, 2006
Danilo Kiš, Homo poeticus, Novi Sad, 2006
David Albahari, "Peter Hantke" i o "Peteru Hantkeu", književna kritika, Beograd, 1986
David Albahari, nestajanje, laž, Vidici261-262, Beograd, 1989
David Albahari, Radio bih, srećan, u svojoj sobi, Polja broj 388-389, Novi Sad, 1991
David Albahari, Imprivizacije na temu P.P., Gradac107, Čačak, 1992
David Albahari, U traganju za idealnom knjigom, Reč, Beograd, 1996
David Albahari, Na rubu raspada, Književnost5-6, Beograd, 1997
David Albahari, Život na dva kontinenta, Književnost5-6, Beograd, 1998
David Albahari, Jerusalim, Književnost9-10, Beograd, 1998
David Albahari, Götz i Majer, Beograd, 1998

- David Albahari, *Snežni Čovek*, Beograd, 2000
- David Albahari, *Ružni snovi*, NIN 44, Beograd, 2003
- David Albahari, *Možda je trebalo da odem u Novi Sad umesto u Kalgari*, *Dnevnik* nodelja 23. Maj, Beograd, 2004
- David Albahari, *O romanima ja ne znam ništa*, *Borba* subota-nedelja, 30–31. oktobar, Beograd, 2004
- David Albahari, *Opcinjen jezikom*, *Politika* subota 13. novembar, Beograd, 2004
- David Albahari, *Neobične priče*, Beograd, 2004
- David Albahari, *Drugi jezik*, Beograd, 2005
- Else Marie Leander Fog, *Pisci kao svedoci: Aleksandar Tišma Književnost je lanac u našim rukama*, *Književni glasnik* broj 4–5, maj –oktobar 2001
- Erih Koš, *Odlomci sećanja, pisci (I)*, *Književnost* 6, Beograd, 1988
- Erih Koš, *Odlomci sećanja, pisci (V)*, *Književnost* 11, Beograd, 1988
- Harijet Pas *Frajdendrjajh*, *Jevreji Beograda Između Ratova*, *Zbornik 6, Studije Arhivska i Memoarska Grada o Jevrejima Jugoslavije*, Beograd, 1990
- Ivo Andrić, *Savez Jevrejskih Opština Jugoslavije*, *Jevrejski Almanan* 1959–1960, Beograd, 1960
- Ivo Andrić, *Savez Jevrejskih Opština Jugoslavije*, *Jevrejski Almanan* 1961–1962, Beograd, 1962
- Ivo Andrić, *Savez Jevrejskih Opština Jugoslavije*, *Jevrejski Almanan* 1963–1964, Beograd, 1964
- Ivo Andrić, *Savez Jevrejskih Opština Jugoslavije*, *Jevrejski Almanan* 1965–1967, Beograd, 1967
- Yakir Eventov, *A History of Yugoslav Jews, From ancient times to the end of the 19th century*, English summary, Israel: Davar, 1971
- Ženi Lebl, *Do “Konačnog Rešenja” Jevreji u Beogradu 1521-1942*, Čigoja, Beograd, 2001
- 【ウェブサイト】
- Aleksandra http://www.alexandria-press.com/arhiva/No_1/aleksandar_tisma.htm
- Blic 2003.6.26 <http://www.blic.co.yu/blic/arhiva/2003-06-26/strane/intervju.htm>
- Danilo Kiš HP (1935-1989) <http://www.kis.org.yu>
- Danas Vikend 2004.3.20-21 <http://www.danas.co.yu/20040320/vikend5.html>
- Danas 2004.2.18 <http://www.danas.co.yu/20040218/kultural.html>
- Danas 2004.5.19 <http://www.danas.co.yu/20040519/kultural.html>
- Danas Vikend 2005 <http://www.danas.co.yu/20050219/vikend5.html>
- Danas 2005.2 <http://www.danas.co.yu/20050219/vikend5.html>
- Danas Vikend 2005.6.18-19 <http://www.danas.co.yu/20050618/vikend4.html>
- Danas Vikend 2005.7.2-3 <http://www.danas.co.yu/20050702/vikend8.html>
- Danas 2005.11.5-6 <http://www.danas.co.yu/20051105/knjigal.html>
- David Albahari u Pragu <http://www.makabijada.com/pragfest.htm>
- Ivan Ivanovic <http://www.srpska-rec.co.yu/arhiva/338/dajstranu.php?a=21>
- Kokkal Fondarion <http://new.kokkalisfoundation.gr/en/articles/2003/12/9/1231/>
- Kritike Snežni Čovek <http://www.zemun.co.yu/albahari/kritike.htm>
- NIN 2003.2.20 <http://www.nin.co.yu/2003-02/20/27468.html>
- NIN 2003.8 <http://www.nin.co.yu/roman/1976.html>
- Sasa Ilić <http://www.omnibus.ba/ble/ilic.htm>
- The good & the dead <http://www.paul-hyde-author.com/kis.html>
- Virtualni Grad <http://www.virtualnigrad.com/?pd=20&pt=486&arch=on>
- VOA <http://www.voa.gov/misc/croatia/ebb.html>
- Vojvodina Arhiva 2003.2-17 <http://www.vojvodina.com/naslovna/arhiva4/030217.html>
- Vojvodina Arhiva 2001.2.2 <http://www.vojvodina.com/naslovna/arhiva2/020201.html>
- Vreme 1999.12.25 http://www.vreme.com/arhiva_html/468/15.html
- Vreme 2005.2.24 <http://www.danas.co.yu/20050219/vikend5.html>
- Vreme 724 <http://www.vreme.com/cms/view.php?id=396807>